



きくち ふみこ  
【合同資源みらい賞】 菊池 文子

美代子さん、あなたへ改めてお手紙を差し上げると知ったら、さぞ驚かれることでしょう。そう、あの日から15年以上が経っているというのに、私はあなたに何も伝えず、感謝の一言さえ書いて渡していないのだから。

いま振り返れば、どんなに情けないそして頼りない日々を過ごしてきたことでしょう。弟が原因不明の病を発症してから入院、通院の繰り返しで、その間にも母の認知症が進み、父も弱っていったのですね。

遠方に住んでいる私に出来ることは、ひと月に一回様子を見に行くことだけでした。仕事で遅く帰ってくるあなたに、弟は時にいら立ち心無い言葉を投げかけたのではないのでしょうか。帰ってからも家事に追われて、あなたは誰にも愚痴をこぼすこともなかったですね。私は家に戻る電車の中で、弟の家族を見捨ててしまう罪悪感でいっぱいでした。

そして数年の間に弟、母、父と次々この世を旅立ってしまったのです。

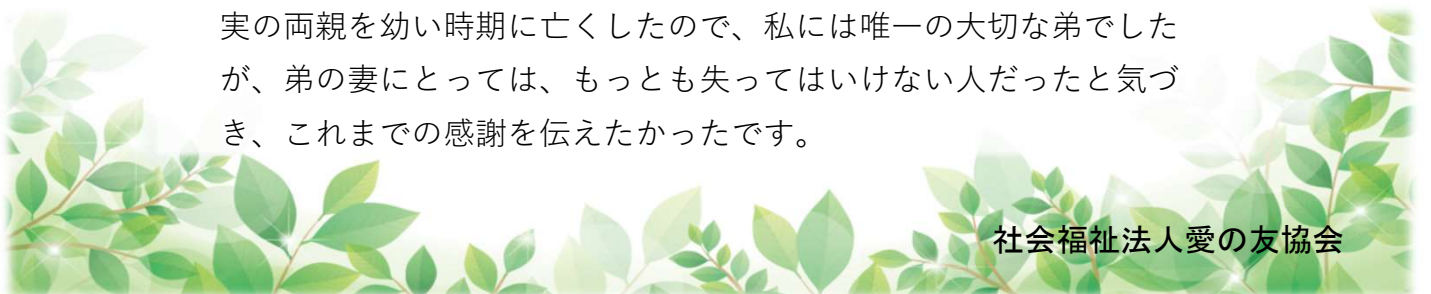
未だにその頃あなたとどんな会話をしていたか思い出せないでいます。弟の会社の机を整理に行ったこと、弟と私の実の両親の墓じまい、それから新しいお墓を作ったことなど、当時は泣く時間もなく夢中だったのですね。仏壇には若い顔の弟や、私たち姉弟を育てて下さった父母がにこやかに笑っているというのにね。

でも、こんな文をしたためて送ったところで、あなたはきっと言うでしょう。

「私こそ、ですよ。お義姉さん。」

あなたがいてくれて良かった。ありがとう。

( 千葉県／68歳／女性／主婦 )



実の両親を幼い時期に亡くしたので、私には唯一の大切な弟でしたが、弟の妻にとっては、もっとも失ってはいけない人だったと気づき、これまでの感謝を伝えなかったです。